

問い 11 この「連研」を通して、感じたこと気づいたこと、うれしかったことを話し合ってください。

連研中央講師・奈良教区
中川 大城

一見仲良く振る舞っているようでも、そこには確かな絆や真摯な関係はなく、ただ集まっているその様子を「みんなぼっち」と言うそうです。職場や学校、地域や家庭など私たちはさまざまなつながりのなかで生きていますが、いま個人の孤独感が強まっています。スマートフォンは新しいコミュニケーションの形を提示してくれました。家にいながらにして、会社の同僚、学校の友だち、また国境を越えて世界中の人々と簡単にやり取りができるようになりました。しかしそういったツールを用いても、孤独を感じている人が多いようです。どんな集まりであっても、ただつながっているだけでは人の心は安心できないのでしょうか。

「人、世間愛欲のなかにありて、独り生まれ独り死し、独り去り独り来る」
(『註釈版聖典』 p56)

お釈迦さまは「人は世間の情にとらわれて生活しているけれど、結局独りで生まれて独りで死に、独りで来て独りで去る」とおっしゃいます。独りということを引き受けて生きるしかない、ごまかさず私たちに示されています。私たちはいくら群れ集まっても詰まるところ孤独だということです。

一方で、孤独でありながら人々は仲間を必要とし、ぬくもりを求めます。人間は独りでありながら、つながりを持ち、ほかの人に支えられないと生きられないという本質を抱えているのです。

とても寒い時期に、あるお寺を訪れた時のことです。そこで久しぶりに見つけました。火鉢です。最近ほとんど見なくなりました。炭のパチパチという音を聞いていると、子どものころの思い出がよみがえってきたのです。祖父がいろんな話をしながら、餅を焼いたり、おかきを焙ったりして食べさせてくれました。そうしている間にだんだんと火鉢の周りには家族が集まってきます。その団らんがとても懐かしく感じられました。文明が発達して、ボタンを押せばエアコンやストーブで適温を保てるようになりました。暖を取るために火鉢を囲う必要はなくなりました。だから人々は別々の部屋へと帰っていきます。時間とともに生活は豊かになりましたが、便利さゆえに失ったものがあつたことを気づかせてくれました。

「連研」で実施される話し合い法座では、心と心を通わせることを教えてくれたように思います。火鉢のぬくもりを共有するように、み教えを共有しながらさまざまなテーマに向き合ってきたからこそ、安心して言葉を交わす

ことができたのだと思います。仕事や学業では競争が強要されたり、人間関係でもストレスを抱えることが多いのではないのでしょうか。そんな私も「連研」では心の扉を開いて本音で語り合うことができました。これはとてもうれしいことでした。ただ人が集まっているだけではなく「ともにみ教えに問い、ともにみ教えに聞き、ともにみ教えに語る」という営みが多くのことを気づかせてくれるのだと思います。

また、ぬくもりが共有できたお互いだからこそ、今度は他者の痛みや苦しみに目も向けていくことを知らされました。「連研」では「12の問い」に順に向き合いながら、自分自身の人生や生き方の振り返りをしてきたように思います。してはならないこと、あってはならないことについても学びました。差別や戦争の問題です。どちらも無関心であってはならない、私たちを常に問い続けるテーマでした。

他者の痛みや苦しみに気づかされたとき「今まで目をそらしてきたのでは」という内面への問いも見えてきました。あるご門徒は「自分の悪いところが見えてよかった」とおっしゃいました。浄土真宗はこうして自らを省みる教えであることにも気づかされました。

「12の問い」やサブテーマでは、環境や格差、そして貧困や原発の問題などさまざまな課題が出てきました。しかしこれは、現代社会の苦悩のごく一部でしかありません。しかし、どれもが重要なテーマであり、その多くが答えのていない課題でもありました。ご門徒から「『連研』を受けてもスッキリしなかった」という感想が聞かれるのはこういったことも一つの要因であると思います。「連研」ではこれらの課題に答えを出すのではなく「大切なことだった」と確認して、「これからも考えていきましょう」と共有することが目的の一つになっています。「連研」が終わったからといって「12の問い」が完結するわけではありません。これからも時々『連研ノート』を開いてみてください。そしてみなさんと一緒に過ごした時間を思い起こしてみてください。「連研」が私に示した課題はむしろ「これからの私の生き方」を考えていくスタートともいえるのです。

人間は孤独です。だからといって欲望のままに他者を押しつけて、傷つけても良いとお釈迦さまはおっしゃいません。相手も同じく孤独である。同じ苦悩を抱えているお互いであったと共感することによって、受け止め方が変わってくるのではありませんか。生きとし生けるすべての者は独りであり、代わることのできない一つの尊いいのちを生きているのです。孤独の共感が、他のいのちを尊重し、ともに生きるというつながりを生んでゆくのです。

問い 11 この「連研」を通して、感じたこと気づいたこと、うれしかったことを話し合ってください。

連研中央講師・宮崎教区
岩尾 秀紀

初めて「連研」に参加した時に、浄土真宗を学ぶという気持ちで来たのに「話し合い」と言われてびっくりする方もいるようです。でも、初めはぎこちなかった話し合いも、何度も行っていくうちに少しずつお互いが見えてきて、やがて和気あいあいとした雰囲気です話することができるようになりました。それを「井戸端会議みたい」と揶揄する人もありますが、井戸端会議にこそ実は私たちの本当が溢れていると思うので、私はそういう雰囲気の話し合い法座が好きです。ご門徒さんと僧侶が一緒になって自分の言葉で思いを語り合う中から生まれる「？」をともに感じ、仏さまの願い、祖師方の言葉に問い訪ねていくのが「連研」です。

さて「この連研を通して、感じたこと気づいたこと、うれしかったことを話し合ってください」が今回のテーマですが「お寺が身近になった」「お坊さんと気軽に話せるようになった」「友だちができた」という方が多いように思います。私たち僧侶にとって話し合い法座から気づけたことは「僧侶ほど聞き下手はいない」ということと聞きました。かなり耳が痛い話です。残りあと1回を残すだけとなった「連研」ですが、スッキリして修了できそうですか？もし心に何かモヤモヤしたものを抱えている方がいらっしゃったら、どうかそのモヤモヤしたものを大切にしていきたいと思います。スッキリと終わるよりも「モヤモヤとした問い」がこれからも繰り返されていくことを何より大切にしたいのです。私たちの苦悩を仏さまの願いに訪ねていくのが「話し合い法座」ですが、しかしそこから答えは生まれません。その問いから生まれるのは新たな問いなのです。

私の組の「連研」修了にあたって皆さんの感想を聞かせていただいた時に「『連研』を受講して本当に良かったのですが、新たな悩みができました」とおっしゃる女性がいらっしゃいました。「実は家庭でのお仏壇のお飾りやお参りの仕方がこれまでお義母さんから教えられたものと全然違うとわかってしまって、これからどうしましょう？」とおっしゃるのです。一瞬、場は笑いで和んだのですが、ご本人にとっては笑い事ではありません。確かに家庭内を円満に保つためには知らなかったことにするののひとつの方法ではあるのですが、知ってしまった今、それでいいのだろうかという新たな悩みが生まれたのです。本当のことを知ると、今まで気づけなかった、見過ごしていたことが気になり始めます。それが新たな問いとなり繰り返していくと

き、物事の多様性を理解し、考えようとする視点をもつことができると思います。

また「連研」を通して、新たな友人ができたことも喜びのひとつです。2年もの間お互いに思いを語り合い聞き合ってきた仲間です。そしてその人も何かに悩み何かに苦しんでいる、私と同じ存在であることもわかってきました。親鸞聖人はそれぞれに苦しみや悲しみは異なるけれども、ともに歩むいのちを「御同朋」とお示しく下さいました。昔、中央教修で「御同朋って仲間外れのない仲間づくりですね」と言ってくれた受講者がいらっしやいましたが、本当にその通りだと思います。けれども現実にはさまざまな差別があるように、残念ながら御同朋の社会になっているとはとても思えません。これまで「連研」での「12の問い」では、私の本当の姿を見つめなおし、差別や戦争といった私の生きる社会の問題を見つめなおしてきました。きっと差別や非戦・平和の問いには「難しいなあ」「私一人が行動してもどうにもならない」とも思ったでしょうし、本当は知らなかったことにしたい問題だったかもしれません。でも、そこで苦しんでいるいのちは私と同じいのちなんだと知ったからには、仲間外れのある社会は嫌だ、差別や争いや抑圧のない社会でありたい、という願いが生まれてくるはずです。だからまずは私と私の教団が差別や争い、抑圧の無い社会になるために何を実践していくか、といった「問い」を私がもつことが大切だと思うのです。

「エール」という朝の連続ドラマで、主人公が夢を追いかけて家族を捨てて家を出るという場面がありました。その時主人公のお父さんが「心配すんな、おめえが（家族を）捨てても俺は（お前を）捨ててねえ」と言うのです。息子の苦悩、悲しみを知って「絶対捨てない」と言うのです。主人公はその父親の肩に寄りかかり嗚咽します。私たちの苦悩、悲しみの現実から仏さまは必ず救うとの願いを発されました。私の本当を問い続けていくとき私は、私を捨てない仏さまと何度もであい直すのだと思います。「連研」が終わっても、これからも皆さんの「れんけん」は続いていくのです。